(7) 品種が変われば、田園風景も変わる！
－作柄調査－

1　こうして回った調査コース

作柄調査は、全道の主要な小麦生産地を小麦出穂後の７月上旬頃に巡回します。生育と病害虫発生の状況を調査把握して、最終日には良質麦収穫に向けた今後の技術対策を協議し、新聞等に発表するものです。

巡回コースは、道央から始まり上川・網走を経由して十勝までの年と、道央から十勝・網走経由で上川までの年とがありました。

2　調査の合間に田園風景を楽しむ

地域毎に特徴ある小麦畑の風景があります。道央の水田転作小麦、上川の転作小麦と春まき小麦や二条大麦（ビール麦）の風景、網走の秋まき小麦と春まき小麦の風景、そして十勝の秋まき小麦一色の広大な風景です。

巡回は移動距離が長いですので、調査は短時間で効率よく行うため忙しいものですが、美瑛の急勾配な丘陵の美しさ、網走の緩やかな勾配の丘の風景、そして大十勝のおおらかな広がりなどを、楽しませてもらいました。

3　変わる田園風景、品種が持つ別の力

平成５年から６年間参加させていただきましたが、この間風景も大きく変わりました。先ず、品種が変わっていきました。平成５年頃の上川はホロシリコムギやチホクコムギが主でしたが、良品質のタイセツコムギが普及し、どんどん広がっていきました。タイセツコムギは穂の色が白色系なので、麦畑の色がタクネコムギのように赤色系とならず、ホロシリコムギのように黄色系とも違うのです。

その後、ホクシンが普及して広がりますと、十勝地方の麦畑の風景色が先の上川のように、チホクコムギの黄色系から白色系へと、色の風景が変わりました。品種の力は地域の畑の風景色まで変えてしまうものなのです。

美瑛では昔のタクネコムギを再び栽培して、あの赤い穂色で写真映りを良くしようという動きがあると聞き、小麦も景観作物として認められたと喜んでいます。

4　金波女性の美しさに酔う！（金髪ではありませんので）

景観としての小麦風景のうち、ビール麦が風になびく姿ほど美しいものは無いでしょう。特に成熟期前の黄金色が、風に柔らかくなびく風景は実に美しいものです。その女性的な美しさには、ビールになる前でも私は酔ってしまいました！ある人が教えてくれました「金波銀波の金波というのは、ビール麦が風になびく姿をいうのですよ」と、なるほどと感心させられました。

5　時代の要請と共に調査ほ場が増える！

作柄調査も以前は各地の主要品種や新品種の展示ほを調査するのが主でした。少し前は良品質が特に求められているのを受けて、品質向上のための施肥試験ほ調査が増えました。最近では、奨励品種候補を目指す系統の補助試験ほ調査も行っています。

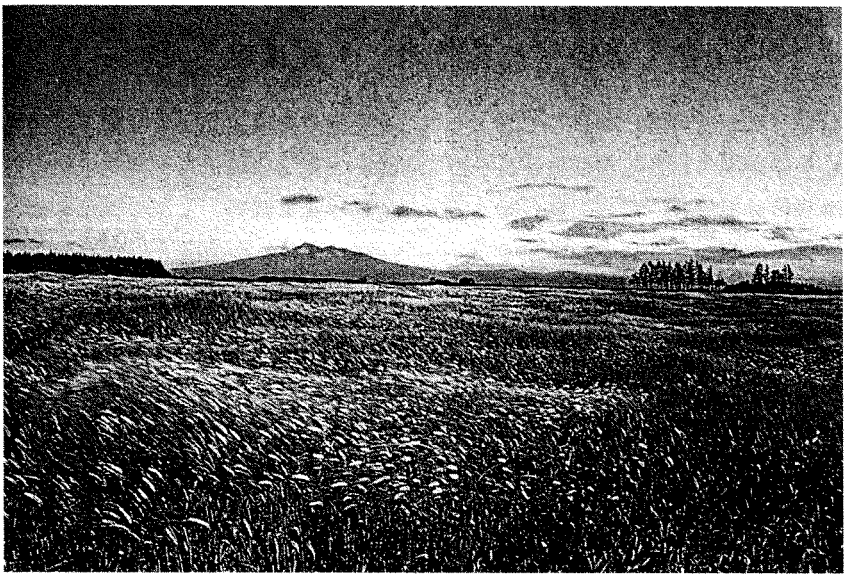
6　日中だけでは足りない情報交換

日中も情報交換はできるのですが、生育調査に目が向いているため、突っ込んだ話は夜に集中しました。夕食会場は統計情報事務所、食糧事務所、専門技術員・研究員、ホクレン、普及センター、麦作組合、米麦改良協会等にによる、麦だけの大情報交換会場と化しました。

7　作柄調査は今後も必要

全道的視野と地域の特性を理解しなければ、今後の道産麦の発展は無いでしょう。作柄調査と新品種開発は今後とも必要です。そのため、新品種によってほ場全体の色が変わるのはやむを得ません。時代の要請が品種を変え、田園風景を変えていくからです。しかし、懐かしい風景、心打つ美しい風景、心に残る色があるなら、いつの日か新品種に農家指定の色が出せたら、とも思います…。

＜佐藤　英夫＞



ビール麦ほ場と斜里岳（麦耕連50年史より）